スペクテーターの世界

山口孝道

【要約】イギリス十八世紀初頭の著名な定期刊行物「スペクテーター」は、当時ジャーナリズムの政治誌中心という風潮に抗し、非政治的な文芸誌を志し、その結果、読者大衆形成の指標とも目される見事な成功を得た。
その成果をめぐり、我々は先ず、名誉革命体制定着こそが同誌の前提であったことを確認し、更に同誌所収の論説の分析を通じて、同誌が、上記体制を地主階級と共に享受しつつあった上層市民階級のイデオロギーを非政治的な形で巧みに表現していたことを論証する。かかる作業によって「スペクテーター」の社会史的意義を把握すると共に、従来、等閑視されていた市民革命後のイギリス社会の知的雰囲気の保守的な動向を示唆する、以上が本稿において意図された問題である。
史林　四八巻二号　一九六五年三月

イギリス十八世紀初頭の社会相、知的雰囲気が論ぜられる時、アディソン、スティールらによる「スペクテーター」（一七一一―一二）が屢々引合いに出されることは周知のとおりである。「スペクテーター」は極めて豊かな題材をその中に含んでいる、その意味では確かに「その内容を論ずることは一時代の社会相を分析する」[1]ことに等しい。しかし多くの場合、文芸作品は過度に一般化されて解釈される。「スペクテーター」を考察する時もこの点を忘れてはならない。「スペクテーター」の世界は決して同時代の社会の無限定な反映ではない、つまり、意識的にせよ無意識的にせよ、「スペクテーター」自身の階級的視角を通して描き出された世界である。従って、そこでは当時の社会的真実の一斑が描かれているとしてもすべてが描かれている訳ではない。いわば、同時代に対する「スペクテーター」的解釈による社会相である。私は、このようなことを念頭に置きながら、「スペクテーター」の世界における生活と意見を検討してみたいと思う。[2]そして、もとより、この試みを通じて当時＝名誉革命体制定着期の社会像、知的雰囲気に

幾分なりともアプローチし得れば幸いである。

① Smithers, P., The Life of Joseph Addison., (1954), p. 212 seq.

② アディソン、スティールの協力執筆による「スペクテーター」は五五号（一七一二、一二、六）まで続き廃刊され、一年半程おいて復刊されたが、それはアディソンの独力によるものであった。そこで以下の考察は五五号までに限ることにする。

一

「スペクテーター」の内容を分析する前に外側から眺めた「スペクテーター」の特徴、意義及び「スペクテーター」を取り巻く状況をしばし考える。

「スペクテーター」の持つ形式・内容こそが当時のジャーナリズムの中から文学を救い出したのだと言われているが、[1] この評言からわかるように「スペクテーター」は何よりも先ず非政治的な文芸誌であった。

政治に係わらぬこと、これは発刊当初からの「スペクテーター」の編集方針である、[2] そして「スペクテーター」の野心は寧ろ次の点にあった。

……哲学を書斎・図書館・学校・大学から解放し、クラブや集会やお茶の席やコーヒー店での話題にする。[3]（第一〇号）

分別ある御婦人方の茶飲み話を、若しこの文章が飾ることが出来るならば、筆者としての光栄この上もありません。[4]（第四号）

と。執筆者たちの意図はほぼ実現された。「スペクテーター」の世界においては政治色は極めて希薄であり、これに反し、日常的な話題が、豊かな哲学的文飾を提供されており、このような試みは社会的にも大きな成功を収めた、すなわち、読者大衆（Reading Public）形成の功は「スペクテーター」に帰せられ、[5] また、「スペクテーター」は聖書に次いで十八・十九世紀社会のマナー、モラルに大きな影響を与えたとされる。[6]

ところで「スペクテーター」の右の成功はそれ自体、追及されるべき問題を示していると言わねばならぬ。元来、ジャーナリズムは政治的使命を負わされて発展して来たものであり、「スペクテーター」が結集し得た読者大衆は決して同誌のように政治を避けた教養主義の雰囲気の中で育成されて来たものではなかった。つまり、イギリスのジャーナリズムと読者大衆は市民革命の進行過程の中で育って来た、すなわち、清教徒革命期のいわゆる政治パンフレッ

トの洪水の中で、ついで、王政復古期にパンフレットが定期刊行物に成長したにせよ、それらに負わされた政治的使命は変るものではなかったし、更に名誉革命後、出版の自由[7]が認められ、イギリス・ジャーナリズムの初期的開花をみた、この「スペクテーター」の同時代期においても、ジャーナリズムは依然、政治論争の好個の手段である性格を止めなかった。むしろ、ロバート・ハーリーがジャーナリズムの政治的役割りを認め、利用したことが示すように、[8]また、当時の著名な文人が何れも辛辣な政論家でもあったことが示すように、ジャーナリズムの政治性はその極に達したかの感があるとも言える。にも拘らず、政治色、党派色を極力排した「スペクテーター」が出現し、読者大衆にアッピールした事実は何を物語るであろうか。

結論めいた表現をとるならば、「スペクテーター」の世界の成立は名誉革命体制が定着したことのジャーナリズムにおける反映なのである。

名誉革命そのものが市民革命の総決算であり、その所産の再確認であり、何ら新らしい争点を提示しない、従ってドラスティックな変革を伴わない妥協的な、安定した「革命」であった。「革命体制」がウィリアム三世の晩年からアン時代にかけて定着して行ったことについては、トレヴェリアンのあの膨大な三部作を繙くまでもあるまい。[9]この時期においては名誉革命の諸原則（Principles of the Revolution）は何れの党派によっても自明的なものとして承認されていた。名誉革命体制に対する最もラディカルな批判（G・N・クラーク）とされるダニエル・デフォーの「多数人民の請願」においてすら、人民の諸権利の最も確実な根拠は名誉革命の所産の諸実定法にすぎなかったし、[10]或る意味では、デフォーとの対極からの状況に対する批判者とも考えられるスウィフトもまた「革命の諸原則」を否定するものではなかった。[11]

モッブすらも利用・動員された[12]一見激烈な党争も、右の安定状況の上に展開されたホイッグ――トーリ間の私的政争に過ぎず、政治は市民生活から遊離し、矮小化されていた。そして、このような政争下にあっても体制の安定を享受しつつ、市民生活は着実な発展を遂げていたのである。

市民階級の基本的要求は名誉革命にいたる市民革命の過程の中でほぼ実現されている、その意味においても政治は

最早市民の最大関心事たり難くなって来ていた、而も、彼らと関係の薄い党争はます〳〵市民をして政治から遠ざからしめ、彼らは私的生活に回帰、安住するに到る。

政治と市民生活が右のように背離している時、ジャーナリズムはどのような動向を示していたか。一言にしてみれば、ジャーナリズムは真の社会的基盤から遊離して徒らに政治の泥沼の中に溺れていたとされよう。すなわち、ジャーナリズムは市民の利害関心の噴出という形で存在するのではなく、ただ有力政治家の頤使に甘んずるというのが、その姿であった。一見、隆盛を誇ったジャーナリズムの活動もウォルポール体制の確立と同時に容易に終止符が打たれたのも右の事情による。

名誉革命の成功によって、市民階級は支配階級の座に着く、と同時に、それに相応しい日常の生活様式の変化が求められ、かつ生じて来る。けれども元来、清教徒革命と異なり、微温な名誉革命の中からは、自ら溢れて市民の日常生活、行動をも律するようなエトスは見出されなかった、日常私生活に安住しながらも、市民階級は此処に、一つの混迷を抱いていた。当時、原始蓄積の体制的進行を背景として社会生活の混乱がみられ、それに対応して様々な矯風運動も盛行したが、[15] その混乱に対する生活、行動規範は空白のままであった。市民階級には支配階級として相応しい日常の生活、行動の規範、意義づけが必要であった、それなくしては彼らの社会的威信の確立も困難なのである。而も市民階級には半世紀来、ジャーナリズムにより育成されて来た知的関心が存した。しかし、政争に駆使され続けているジャーナリズムはそれらの要求を満し得べきもなかった。非政治を標榜し、「教えかつ楽しませよう」と努めた「スペクテーター」のみが、この要求に応えたのである。アディソン、スティールらの時代感覚は潜在的な読者大衆の要求を認識し、彼らの豊かな文学的才能を以て、その要求に応えた訳である。

① 福原麟太郎、「散文、随筆、ジャーナリズム」（『英米文学史講座』5（昭和三十六年、研究社刊）所収）を参照。

② cf., The Spectator. (Everyman's Lib. Ed.) vol. 1., p. 5.
なお、以下の「スペクテーター」の巻数、ページ数は何れも前掲版による。

③ ibid., vol. 1, p. 32.

④ ibid., vol. 1, p. 16.

⑤ 例えばヒルは述べる、「（アディソン及びスティール）の成功は確固

とした読者大衆の存在を示すものである…」と。cf., Hill, C., The Century of Revolution, 1961, p. 300. seq.

けれども更に積極的に、「スペクテーター」こそが読者大衆の形成に決定的な役割りを果したと強調するのがベルジァムである。cf., Beljame, A., Men of Letters and the English public in the XVIII th Century., trans. by Lorimer, E. O. (1948), Chap. III. 或いは、内多毅、『イギリス小説の社会的成立』（昭和三十五年）九三ページ以下を参照。なお、本稿はこの著作から多くのものを負っていることを付記する。

⑥ ドウブレイはアディソンについて、「文学の意義が社会的影響という点から判断されるならば、彼はイギリス文学史上、比類なく重要な人物である」としている。Dobrée, B., English Literature in the early Eighteenth Century, (1959), p. 120.

また、スマイザースによると、「イギリスの思想、風俗に対する「スペクテーター」の影響を説明するには一巻の書物を要する」、その影響は聖書以外のどの書物をも凌いでいる。Smithers, P., The Life of Joseph Addison (1954), p. 245.

⑦ 一六九四年に The Printing Act が撤廃されている。この間の事情については、cf., Siebert, F. S., Freedom of the Press in England., (1952) p. 260, seq.

⑧ 「新聞の持つ政治力は、その間、急速に発達した。そして、オクスフォド卿、ハーリーはその重要性を最初に認識した一人であった」。デフォーもスウィフトも、彼の保護の下で時評活動を行なった。cf., Stephen. L., English Literature and Society in the Eighteenth Century (Rep. 1955) pp. 41~2.

⑨ Trevelyan, G. M., England under Queen Anne, 3 vols. この著作については、E・H・カーが『歴史とは何か』（岩波新書所収）二七―八ページで簡潔な評価をしている。

⑩ デフォーの「多数人民の請願」（Legion's Memorial）については、拙稿、「Defoe の政治思想と名誉革命体制」（『歴史学研究』二四八号所収）を参照。

⑪ スウィフトのアウトラインについては cf., Quintana, R., Swift. An Introduction. (Rep. 1962) 簡単には、米田一彦、「スウィフト」（前掲「英米文学史講座」所収）参照。更に、「スペクテーター」の筆者たちとの確執については、cf. Goldgar, B. A., The Curse of Party (1961).

⑫ Beloff, M., Public Order and Popular Disturbances (Rep. 1963) p. 48 seq.

⑬ 当時の世相については、夏目漱石『文学評論』、第二編十八世紀の状況一般を参照、また、矯風運動については、Bahlman, D. W., The Moral Revolution of 1688 (1957) が詳しい、但し、この書には政治、社会的背景に関する配慮が欠けている。

二

「スペクテーター」の世界は、政治を排した日常生活の世界である、そして、それは名誉革命体制の安定に由来するものである。これが前節において確認されたものにほかならない。ところで、この「スペクテーター」の世界がどのような歴史的、階級的性格を持つものであるか、これを追及することが次の課題である。

ジャーナリズムは執筆者の個性の表現であると共に、読者大衆の存在と意識の反映でもある、「スペクテーター」の世界はある一つの視角から映じた名誉革命体制の像でもある。従って「スペクテーター」の世界を論ずる前に、名誉革命体制の社会構成の把握及び「スペクテーター」の読者層の階層分析を試みることが必要であるが、私にはそれを果す能力も余裕もない。そこで以下、視点を「スペクテーター」の記述に置いて論を進めたい。

視角を先ず「スペクテーター」の主観に限り、「スペクテーター」がどの階層を念頭において執筆されたものであるかを調べてみると、「スペクテーター」自身の語るところによれば次の通りである。

㈠「規則正しい生活をしている家庭」。

㈡「ジェントルマン諸氏」……但し、この階層には商人、医者、王立協会の会員、法律家、政治家で、何れも有閑なものが含まれる。

㈢「無関心層（The Blanks of Society）つまり、商売や日常生活が提供する以外の話題を殆ど持っていない人々」。

㈣「御婦人層……但し、化粧室が彼女らの重要な仕事場であり、髪をきちんと整えることが生活の中で重要な日課であるような」婦人層。（一〇号）[1]

「スペクテーター」は右の読者層を考慮して執筆された、ところで、名誉革命期の階級構造の主軸として取上げられる社会経済史学のいわゆる中産的生産者層、若しくは初期産業資本家層は、「スペクテーター」の読者層として数えることは可能であろうか。或いは上記の第三の層に含め得るかも知れない、しかし、「スペクテーター」の世界が劇場、コーヒ店、お茶の席等の、いわば社交界に限られ、従ってその世界が徹底的に消費性によって貫かれており、而も毎号の巻頭に古典的格言を飾り、読者に一定の伝統的教養を要求していることを考えるならば、現実には中産的生産者層は「スペクテーター」が対象とした読者層からは除かれていたと思われる。[2] すなわち、「スペクテーター」により意識された読者層は曖昧な規定ではあるが上層中産階級を主体としたものであったと考えられる。

さて、「スペクテーター」の歴史的性格を示すものは、何と言ってもその世界で展開された生活である。ところで、この世界の生活に触れようとする時、絶好の手掛りを提供

しているのが、小説の萠芽とも言われる、一連の「サー・ロジャー・ド・カヴァレー」ものである。[3]「カヴァレー物語」は発刊早々の第二号から廃刊直前まで、折々展開された「スペクテーター・クラブ」の常連紳士諸氏の言行録であり、性格描写であるが、重要な登場人物を紹介すると、

サー・ロジャー・ド・カヴァレー(Sir Roger de Coverley)、ウスターシャーの名門の出で従男爵である、次に、

サー・アンドルー・フリーポート(Sir Amdrew Freeport)、サー・ロジャーと対照的な存在の富商、

セントリ(Captain Sentry)退役軍人でサー・ロジャーの資産相続人、

ウィル・ハネコーム(Will Honeycomb)地主出身の有閑な風流紳士、

他に、名前の記されていない牧師とインナー・テンプル法学院所属の紳士の計六人である。[4]

言うまでもなく、この構成は「スペクテーター」が対象とした既述の読者層とほぼ一致するものであり、名誉革命体制の支配層を反映するものにほかならない。

ところで、右の六人の中、最も注目すべきは卿紳、サー・ロジャーと、大商人サー・アンドルーである。以下、若干の紙幅を費してこの両人の言行の分析を試みる。

イギリス文学史上、最も好感の持てるトーリー卿紳と評されるサー・ロジャー[5]の言行は、確かに現代の読者からも微笑を誘うに足るものであるが、その社会的性格はどのようなものであろうか。

結論的に言うと、サー・ロジャーは生粋のトーリー派地主であり、マックス・ウェーバーのいわゆる「名望家」が、彼において、肉づけされた・具体的な姿で表現されている。つまり、イギリス十八世紀社会の安定と停滞の要因であった、あの地主支配体制が、サー・ロジャーの存在をめぐって極めて生き生きと描き出されている。

この地主支配の持つ特質は、伝統の持つ威信、地代収取の経済的基礎、地主の行政的権能及び地主と国教会との結合の四点に求めることが出来るが、[7]これらの諸点は何れもサー・ロジャーの兼備するところである。

彼は二十二歳で名門の家督を相続し(一一三号)[8]父祖以来の小作人を多数抱えている大地主であり、而も経営の才も豊かな由である[9](一〇七号)。また、彼は二十三歳の若さで

州のシェリフに任命され、現在は治安判事であり、四季裁判所の法廷では有能ぶりを発揮する（二号）[10]。更に、カヴァレー村の教会の保護者であり、優れた牧師を雇っている、この牧師は日曜日毎の見事な説教により教区民に多大な感化を与えているのみならず、他面村落経営においても、サー・ロジャーの片腕としてなみなみならぬ手腕を示す。例えば、小作人たちの訴訟騒ぎは概ね彼によって調停され、その結果、小作人たちの訴訟騒ぎは皆無に近いという状況になっている程である（一〇六号）[11]。サー・ロジャー自身も、勿論、熱心な国教徒であるが、非国教徒に対する「仮転向禁示令」の成立を喜び（二六九号）[12]、死の直前には論敵サー・アンドルー・フリーポートに「信仰統一令」[13]を贈った（五一七号）彼は高教会の立場に属すると言うべきか。

以上に加え、サー・ロジャーの人格が、彼を優れた家父長たらしめていることは言うまでもない、「スペクテーター」は家父長に関して簡潔・適確に次のように述べる、

雇い人たちへの博い愛に基ずく尊敬を一身にあつめている人は、その家ではただの主（あるじ）というよりも君主のような地位を占める。下す命令は義務というよりも恩顧のしるしと受けとられ、主に近づく名誉は、命令通りに仕事をしたことへの褒美くらいに感じられるのだ。（一〇七号）[14]

この言葉はサー・ロジャーが自ら持つ威信とそれに対する彼の家僕の恭順について述べているのだが、同時にカヴァレー村におけるサー・ロジャーの存在についてもあてはまる表現なのである。

さて、右のように優れて家父長的な存在であるサー・ロジャーが地主階級の代表とすれば、他方、市民階級の典型として描き出されているのがサー・アンドルーである[15]。先ず、彼の人となりが次のように紹介される。

彼は一代で産をなし、今や、ロンドンの実業界で知らぬ者とてない著名な貿易商である。そして疲れを知らぬ勤勉家で優れた判断力と豊かな経験の持主である（二号）[16]。彼は、まことの力は技術と勤勉によってかちとられるという持説を譲らない（二号）[16]、また彼にとっては「万物の価値の尺度は数である」（一七四号）[17]。彼の人生は「仕事（business）と道楽」ではなく、「仕事（Labour）と休息」である（二三二号）[18]、この彼が節倹を旨とするのも当然であろう、彼のお気に入りの格言は「一ペニーの節約は一ペニーのもうけ」である

（二号）[16]。合理・勤勉・禁欲、サー・アンドルーの背後には初期資本主義時代の、あのピューリタンのイメージが窺われる。[19]

更に、サー・アンドルーは商人として高いプライドを持つ、彼は自己の利益は当然なものである（reasonable）と考える、商人は誰にも迷惑をかけはしない、否、それどころか、貿易活動によって商人は

貴族がなし得る以上に、多くの人々に雇用と生計の便を供給する、更に、貴族すらも彼の所有地の作物を売り込む外国市場を獲得したり、彼の地代を増大させるという点では商人の恩恵を蒙っている。……（一七四号）[20]

と主張する。

しかし、サー・アンドルーの発言の中で、最も注目すべきものは二三二号において紹介された経済論である、

彼はここで、彼の経済に対する眼が単に流通過程に止まるものではなく、生産過程をも見逃していないことを示している、彼は取引の対象である商品の本質が何であるか、次のように言う、

私どもが輸出する商品は、なるほど、土地からの産物ではありますが、それらに含まれている価値の大部分は人間の労働なのです、と。[21]

彼の論理は更にひろまる、彼はウィリアム・ペティを援用して[22]手工業的分業の意義を強調する、

実際、一個の時計をたった一人で作った場合には、百人で百個作る時程、低価格では仕上りますまい。何故なら時計製造には様々な工程がありますから、どんな人だって、一人で全工程に等しく適任ということはあり得ないことです、仕事は退屈でしょうし、仕上げは不体裁になってしまうでしょう。しかし、百個の時計が百人の人々によって作られるとしたらどうでしょう、ケースを一人に割当てる、文字盤はほかの男に、歯車は或る者に、スプリングは誰かにと、その他あらゆる部品を適任の者に委ねます、一人の男がいくつかの工程にたずさわるというややこしさもありませんから、どの連中も彼の唯一の工程を、より高い熟練と能率を以て成し得ることでしょう。要するに、百個の時計は前の例に比べて、それぞれ四分の一の時間で仕上がり、従って、たとえ、各人の賃金が前と同一としても、四分の一のコストで仕上がったことになります。（二三二号）[23]

勿論、商人としての彼の狙いは、生産の発展ではなく、商品価格の引下げにある、しかし、その論理が単純な低賃

金――低価格主義ではなく、生産様式に着目し、その合理化の推進により、商業利潤を高めるという点に一つの特色が認められる。

ところで、サー・アンドルーの経済論の第三の問題点は、彼の理論がそれなりに、視野の広さを示していることである。彼は前掲の他に、労働の供給量を増大させ、それにより労賃の引下げ[24]を図っているのだが、彼は此処で、この政策のもたらす結果、影響について、商人・地主・職人と、それぞれの配慮を払う、商人については言うまでもないが、地主に関しては、結局、低価格のため市場の開拓になるのだから「好ましい結果」が招来されるとし、職人に対しては、実質賃金は不変である、従って彼らの購買力は低下しないと述べている。[25]以上のような論理の妥当性は兎も角、一つの社会政策の及ぼす波紋について広い視野を以て検討していること、或いはそれが可能であるということは、商業資本が経済体制においてどの地位を占めているかを示唆している。

サー・アンドルーの存在は、一つの明確なモラルを持ち、生産労働の価値を把み、それをふまえて商業利潤を追及するという、ある程度近代性を備えた商人、而も、それが、今や、新たに支配階級の地位に辿り着いたということを示すものである。

ところで、この対照的な二人の男が、一つのクラブで激論を交しながらも親交を続けているという点に、地主階級と市民階級との妥協の上に成立したと言われる名誉革命体制の反映をみることができるが、但し、この二人に対する「スペクテーター」の扱いに自ら軽重があるということは見逃し得ない問題である。

サー・ロジャーの死は「スペクテーター」廃刊の予告でもあったと言い得るように、彼に対しては誌上で最も多くのスペースが与えられ、その人となりが具体的に、最も精彩に富む姿で描き出されている、これに反し、僅かなスペースで[26]紹介されているサー・アンドルーは、その意見が明快ではあるが生活がない。サー・ロジャーについては逆なことが言えるが、むしろ、彼の保守的な意見が断片的であり、口吻に近いという点に、また、よりリアルなものを感ずる。

要するに、スペースの点からみても、描写の点からみても「スペクテーター」の主役がサー・ロジャーであったこ

とは否定できない、従って、この視角から「スペクテーター」を概括すれば、「彼（＝アディソン――引用者）が教示した社会道徳の本質は、伝統的なイギリス農村社会の家父長的精神からの借物なのである」[27]という一文学史家の評語は妥当なものと言わねばならない。

しかし、以上の行論にも拘らず、サー・ロジャーの人物点描に眼を奪われて、「スペクテーター」が伝統的な地主支配体制存続の夢を追い続けたと見做すことは「スペクテーター」の歴史性を誤解するものであると私は考える。「スペクテーター」の世界にも自ら社会的動向が示されている。そして、その中、最も基本的なものは商業資本の支配であり、それと絡みあって、伝統的な農村社会すらもブルジョア的変貌を余儀なくされているということである。[28]

サー・ロジャーを頂点とした地主社会は必ずしも安定したものではなかった。

経済観念が希薄なために所領を手放す破目に陥る多くの卿紳の存することが、ほかならぬサー・アンドルーによって指摘されている（一七四号）。[29]

次に名門地主が伝統的な生活様式に固執する余り、一門に無為、徒食の寄生的人物を産み出しつつある現状が指摘され、批判されている。クラブの同人で、サー・ロジャーについで多くのスペースを与えられているハネコームも、それに近い人物だが、[30]カヴァレー村で、サー・ロジャーと親しいウィル・ウィムブルは寄生的人物の典型として描かれている。この中年男は、名門の出身にも抱らず、次男の故に所領とてなく、仕事はと言えば、兄の狩猟の際、頭領になる以外は定職もない、しかし、持って生まれた器用さと気さくの性格のため村では重宝がられ、名門の故に尊敬もされている。しかし、「スペクテーター」氏はこの男の善良な魂と多忙な腕が本人にも他人にも殆ど役に立っていないと嘆き、すっかり考えこんだあげく次のように述べている。

ウィル・ウィムブルの例は多くの良家の次・三男についてありふれたことである、とかく、良家の人々は子供たちが身分以下の商業や職業について成功するよりも、卿紳として餓えていた方がましだという工合に考えている。このような考えがヨーロッパの各地に虚栄と寄食とを生み出しているのである。……と。

しかし、商業国家であるイギリスでは、次、三男が誠実と

勤勉により、長兄以上の財産家になった例があるとして、今後のあるべき途を示唆する（一〇八号）[31]。

けれども伝統的、家父長的地主が次第に過去のものとなりつつあるということは何よりもサー・ロジャーの存在自体の中に示されているのである、その点では既に述べたように、サー・ロジャーの意見が、多く断片的な口吻に限られ、而も彼は多分に慷慨家でもあったことに注目すべきである。だが、伝統的地主支配の終焉を何よりも強く訴えるのは彼の死である。家父長的な律儀さが彼の命取りとなった[32]、そして、独身で過した彼には当然実子がなく、その甥が遺産を相続する、これによって読者はサー・ロジャーこそが最後の家父長であったことを悟る、サー・ロジャーの死を告げた哀切な一篇は、彼によって象徴された家父長的農村支配に対する挽歌でもある。勿論、サー・ロジャーの死と共に「スペクテーター」のクラブも閉される、それは「スペクテーター」における彼の存在の重みを示して余りある、にも拘らず、「スペクテーター」の世界の後に来るべく暗示されているものは明るい。クラブは解散された、そして、各人は社交界を後にそれ〴〵の生活の基盤に立ち帰って行く、彼らの生活の将来にはかげりはない。それは彼らが市民的モラルの上に生きて行くからである[33]。

農村社会から家父長的精神が消え去り、新たに企業家的営利精神が入り込んで来る、すなわち貿易商人サー・アンドルーの農業資本家への転身である。彼は決してサー・ロジャーの亜流ではない、両者の間には地代に拠って生きるか、企業家的農法によって生きるかという決定的な相違がある。新たに農業経営に打込もうというサー・アンドルーの意気込みをみよ、彼は手紙で次のように述べている、

……小生は、最近、改良の見込みのある素晴しく広大な土地を入手致しました、そして既に計画に従って一部を耕作し、他に柵を構え、植林をし、更には湿地の干拓を始めております。せんじつめれば、このブリテンの大地に、いわば小生の持分を有している訳でございますから、小生としては、この土地を女王陛下の支配地の何処にも劣らぬ程、素晴しい土地に仕上げる所存であります。少くとも寸土たりとも最高の収益をあげるまで栽培せずにはおきません、……小生の所有地を見舞う一降りの雨とも或いは一注ぎの陽光たりとも農地のために活用せずにはおきません、その季節の収穫に利用せずにはおきません、以上が農業経営家としての小生の抱負であります。……

（五四九号[34]）

抜け目のない、この新しい農業資本家は、一方において、後生に備えて、養老院設立などの慈善行為をなすと共に、他方では近隣の安価な労働力を農業経営に利用しようともくろんでおり、これをしも慈善行為と称している。[34]

右の引用によって、サー・アンドルーの転身が「田舎へ引籠る」というような消極的な行為でないことは明白な筈である、しかし、何故、このような転身が必要であったか、それについてもサー・アンドルーは語っている、

従来、小生の財産の大部分は海上で揉まれ、証券界で浮き沈みするという不安定性・動揺性の著しいものでありましたが、今日では堅実な土地・不動産の形で安定しております。小生は今まで、財産を証券・風・波というあの不確実なものにさらしていた訳ですが、この度、これを切替え、かなりの土地を購入したという訳です。（五四九号[34]）

サー・アンドルーを貫いているものは利潤の追及である、ただそれが、一獲千金的な[35]利潤追及から確実な利潤の追及という立場へ変ったにすぎない、言うまでもなく、この時期において商業資本が確実な利潤を求めて農村へ流入して行ったことは社会経済史家により既に指摘・承認されている史実であり、そしてこれら農業資本家により農業革命への気運が醸成されて行ったことも周知のところである。[36]すなわちサー・アンドルーの転身はこのような社会的事実の反映にほかならない。

このようにサー・アンドルーの転身は決して市民階級的性格の喪失を意味するものではないし、農業社会にとってみれば資本主義化への一歩の前進ですらある。しかし、サー・アンドルーの立場自体に、従って「スペクテーター」の世界そのものにも限界があったことは当然指摘されなければならない。而もそれは単に年代的な制約によるものではない、この点は視角を広めた場合、明確となる。すなわち、この時点においては議会的重商主義の体制下に、産業資本の着実な発展がみられた、そして、その極に、産業革命の展開、資本主義の確立が招来される、他方、このような動向にふさわしく、「スペクテーター」と同時期に、アダム・スミスへ接続する、生産者大衆の立場からの国内市場のヴィジョンが早熟的に形成されつつあった、[37]けれども「スペクテーター」の世界には、従ってサー・アンドルー

の経済観には、それが欠けている、既にみたように、サー・アンドルーは低賃金――低価格主義をとっている、彼は常に賃金の引下げ（少くとも名目的には）を狙っている、これからは国内勤労大衆が彼の市場となり得るという論理は期待し得ない、また、「スペクテーター」の世界における有効需要は一部上層階級の奢侈品への欲望が核である。人間の虚栄心が多くの人々の生計の支えとなるという投書氏の見解（四七八号）[38]などはそれを裏書きするであろう。

「スペクテーター」の、このような経済理念は、既述のスミスへの途とは異なっている、そこに、一つの限界を見出すことができる。さて、「スペクテーター」の歴史性、階級性をたずねて来た本節の結論は既に明らかであろう、すなわち、それは名誉革命体制期の商業資本の立場が基調となっている、「スペクテーター」の経済理念も、そこに局限されている。そして、理念の限界にも拘わらず、サー・アンドルーは産業革命の前哨となる農業革命の途を歩むことになる。但し、このような基調を持つ「スペクテーター」の世界で、何故、サー・ロジャーが主役を演じたのか[39]、残された問題はこれである、私はそれに充分答えることは出来ないが、日常世界の変革は社会の基底体制の変革よりも遅れがちであること、そして早熟なイギリス革命の場合、殊にそれが著しかったこと、而もイギリス資本主義は、残された封建的残滓をも自己の成長の主要な基盤としたことなどを指摘しておこう、図式的な答えではあるが、「スペクテーター」の矛盾は右の事実を反映したものではあるまいか。

① Spectator, vol. 1., pp. 32-3.

② 中産的生産者層を読者としたものは、'common man'., 'the masses'、を対象としたデフォーの "Review" (1704-13) ではないかと思われる。cf. Payne, W. L. L. (ed.) The Best of Defoe's Review (1951) intro. xvii. 及び宮崎芳三「デフォー」（前掲、『英米文学史講座』所収）。

③ cf. Trickett, R., The Growth of Literary Taste in the Eighteenth Century in Natan, A., (ed.) Silver Renaissance., (1961) p. 158. しかし、この点については内多、前掲書が必読であろう。尚、カヴァレーものでは簡単には、Deighton, K., (ed.) Coverley Papers from The Spectator (1957) がある。

④ Spectator, vol. 1, pp. 6～10.

⑤ Trevelyan., op. cit., vol. 3. The Peace (Rep. 198) p. 101.

⑥ マックス・ウェーバー、『支配の社会学』（世良晃志郎訳、昭和三十五年）二六二ページ以下参照。

⑦ 「……前資本主義的な社会ではどの社会をとってみても、階級の利害がまったく（経済上）はっきりした形であらわれえないというこ

とが、その社会の本質に属するものだからだ。というのは、つまり社会がカストとか身分などによって構成されているばあいには、社会の客観的、経済的な構造のなかには経済的な要素が政治的・宗教的などといった要素と解けがたく結びついているという事情があるからだ。」というルカーチ〔平井俊彦訳、『階級意識論』(一九五七)、二九ページ〕の指摘は十八世紀イギリスの地主支配体制にも妥当する。

⑧ Spectator, vol. 1, p. 342 seq..

⑨ ibid., vol. 1, p. 326 seq..

⑩ ibid., vol. 1, p. 7.

⑪ ibid., vol. 1, p. 326 seq..

⑫ ibid., vol. 2., p. 303. 一七一一年に、Occasional Conformity Act が成立し、従来黙認されていた非国教徒の公職就任が禁止された、このため、ホイッグ党からピューリタン的要素が排除されたと言われる。cf., Jones, I. D., The English Revolution, (Rep. 1948), p. 174, N. 3. なお、この法令の内容については、cf., Browning, A., (ed), English Historical Documents, vol. VIII. (1953), pp. 405~8.

⑬ いわゆる Clarendon Code の一環として知られる一六六二年の Act of Uniformity である。cf. ibid., pp. 337~82.

⑭ Spectator, vol. 1, p. 327. 但し、訳文は朱牟田夏雄訳(『世界人生論全集』5、所収)による。

⑮ 「スペクテーター」においては Landed Interest 及び Money'd. (or Trading) Interest という表現がとられる。cf., ibid., vol. 1, p. 384, vol. 2., p. 17.

⑯ ibid., vol. 1., p. 8.

⑰ ibid., vol. 2., p. 18.

⑱ ibid., vol. 2., p. 188. なお、三一七号では、サー・アンドルーの知人たる一市民の日常生活が紹介されているが、(cf. ibid., vol. 2., p. 457 seq.) その規則正しさと律儀さとは三一三号で示される一有閑婦人の生活とはまさに対照的である。(cf. ibid., vol. 3, p. 5 seq.)

⑲ Routh, H. V. は、「スペクテーター」を、ピューリタニズムから成長した新しいカルチュアの典型とみ、その「スペクテーター」の精神がサー・アンドルーに具体化されているとみる。cf. The Cambridge History of English Literature. vol. IX. (Rep. 1952), pp. 49~52.

⑳ Spectator, vol. 2., p. 19.

㉑ ibid., vol. 2, p. 189. 彼は此処で、「労働は富の父であり土地はその母である」というペティの命題を援用している。

㉒ Discourse on Taxes. (1662)。更に二〇〇号においても "Political Arithmetick" からの援用がある。cf. ibid., vol. 2, p. 97.

㉓ ibid., vol. 2., p. 190.

㉔ 彼は現行の救貧制度が怠惰に対し、賃金を支払うものであると批判し、これを廃止して浮浪者の労働力を活用する方向に切り替えるべきだと主張する。cf., ibid., vol. 2. p. 189.

㉕ ibid., vol. 2, p. 190.

㉖ サー・ロジャーに対しては通算二九号、サン・アンドルーには一一号、ハネコームには二二号が与えられているという計算がされている。内多、前掲書、一〇五ページ。

㉗ Legouis and Cazamian, A History of English Literature. (Rep. 1954) p. 784.

㉘ 以下の行論には、内多、前掲書における「スペクテーター」論に対する批判の意も含まれている。

㉙ 彼は痛烈にも次のように言い放っている、「……他の多くの卿紳た

ちが父祖伝来の所領を手放し、彼らよりもずっと経理に明るい新しい主人たちに途を譲っているのは気の毒なことだとは思います、けれども、その財産が、怠慢のためにそれを失う人よりも、勤勉によってそれを得る人にこそ、はるかにふさわしいこともわかり切ったことです。」Spectator, vol. 2, p. 19.

㉚ ハネコームについては次のような評価が与えられている。「ウィル・ハネコームの存在は……王政復古以来残存している伝統的な道徳や行儀作法を批判する多くの機会を『スペクテーター』に与えるものである。」Courthope, Addison, (English Men of Letters Series). pp. 106～7. cit. by Deighton, K., op. cit., pp. xiv-v. 「スペクテーター誌」第二号（一七一一・三・二）で、スティールの描いたウィル・ハネコームの性格には、頭のからっぽなロンドンの社交児に対する風刺も幾分かは意図されている。」Brauer, G. C. Jr., The Education of a Gentleman, (1959) p. 55.

㉛ Spectator, vol. 1., pp. 329～31.

㉜ サー・ロジャーの計報は彼の執事によってもたらされたが、次はその一節、「……考えてみますと、主人の命取りとなったのは、この前の四季裁判所ではないかという気がします、その裁判は気の毒な未亡人とその人の父親のない子が、近所のある紳士からひどい目にあわされたという事件でしたので、主人は立ち会わずにはいられなかったのです、御承知のように私どもの主人は何時も気の毒な人の味方でした……」（五一七号）、ibid., vol. 4, pp. 131～32. 家父長的な思いやりと律儀さがもたらした死、まことに象徴的な死と言うべきである。

㉝ この事を最もよく示すのは、「三十年間、都会の煤煙と風流の中で過した」ウリィアム・ハネコームが田園生活に戻り、そこで小作人の娘と結婚したことである、それは決して内多氏が指摘するような、サー・ロジャー的生活への転換ではない、そのことは、結婚生活に対する彼の期待が物語る、以下参照。「彼女によって、私の後継ぎは約束されています、さて彼女との縁組の結果、世上、誤って天賦の贈り物とされている高い称号や、有力な縁者を子供に残してやることは出来なくなりましたが、しかしもっと意義のある、もっと価値の高い天賦、つまり丈夫な体と健康な体質という贈り物を子供に伝えてやりたいと思います」、（五三〇号）ibid., vol. 4, p. 171. 此処で述べられているのは明らかに市民階級の生活観である、これによって彼は没落の憂目を免れることができよう。

㉞ ibid., vol., 4, pp. 230～31.

㉟ 勿論、適正な利益も主張する彼は暴利を貪っていた訳ではない。

㊱ cf. Selley, W. T., England in the Eighteenth Century, (Rep. 1957), p. 199.

㊲ この点については、小林昇、『重商主義解体期の研究』（一九五五）序論を参照。

㊳ Spectator, vol. 4., p. 15.

㊴ サー・ロジャーとサー・アンドルーの取扱いについては、アディソン・スティール間に意見の不一致のあったことが伝えられ、（内多・前掲書、一一三ページ以下、参照）スマイザースによると、サー・ロジャーはスティールのなぶり殺しを避けるために、アディソンが安楽死をさせたと言われる。Smithers, op. cit., p. 242.

三

前節においては「スペクテーター」の叙述的な面に注目し、そこに展開されている社会相を分析したが、この節で

は視角を移し、「スペクテーター」の論説的な面を検討する。勿論「スペクテーター」の論説は切実な課題を前にして表明されたものではなく、或る意味では卑俗な実践的なものであり、また、整理された論理に貫かれているという訳でもない。しかし、却って、このような文章こそが時代の知的雰囲気をよりよく表現し得るのではあるまいか。

ところで、哲学を一部専門家の手から解放し、広く市民生活の中へ導くことを、その使命として数えた「スペクテーター」は、様々な問題について意見を述べているが、此処では比較的に思想史的な意義をも持ち得ると思われる政治論、教育論及び秩序観を取上げ、考察を加えることにしたい。①

① 以下において屢々、ロックとの比較が問題になるが、それは、十八世紀の思想の流れの中ではロックの存在が無視できないこと、及び一時、無視されていたロックの思想を、「スペクテーター」が再評価した〔cf., MacLean, K., John Locke and English Literature of the Eighteenth Century, (1962), p. 11〕というような理由による。

イ 政治論

本来、政治誌を志さなかった「スペクテーター」には政治的発言が極く少ないのは当然である、しかし、その少ない発言①はまた自ら「スペクテーター」の本質を鮮かに示している、殊に二八七号は「スペクテーター」の抱懐した政治理念を明確にあらわしたものとして注目される②、以下、この号を中心に考察を進める。

この号を一読して直ちに気づくことは「スペクテーター」が現状に満足しているということ、従って体制維持、現状追従という態度を政治に対して持していたということである。

さて、二八七号はイギリス国制への頌詞であるが、そこを一貫して流れるモティーフは自由の問題であった、すなわち自由を保証する政治制度としてイギリス国制を讃え、而も自由の権利根拠を人間性の中に求めている。次に自由を維持するために立法機関のあり方について論じ、最後に自由の意義について語っている。だが注意すべきことは、この自由論が自ら秩序論をもなしていることである。つまり、イギリス国制における自由は「統治の秩序と財政の許す限り」とされているように、自由論の底流乃至は前提として秩序への関心或いは信頼が存している。ジョン・ロッ

クにおいて個人と社会とが調和していたように、「スペクテーター」においても上述したような意味で自由と秩序が程よい調和を保っている。この事は、言うまでもなく、市民階級が獲得し得た社会的栄光を物語るものである。けれども、「スペクテーター」における自由が所与の体制の安定を享受するという類のものである限り、ロックにより示された変革へのエネルギーは見られない。この点は歴史具体的にはどういう事になるのだろうか。

「スペクテーター」は自由の維持について次のように述べる。

この自由が最もよく維持されるのは、立法の権力が何人かの手に保たれ、而も、殊に、それらの人々が異なった階級（ランク）に属し、異なった利害を持っている場合である。……（二八七号）[3]

名誉革命体制は政治的には市民階級と地主階級の妥協により成り立っていると言われるが「スペクテーター」は右の引用が示すようにこの両階級の妥協、均衡を要請しているにすぎない[4]、そして、その妥協の余り、例えばジョン・ロックの攻撃の対象にすらなったフィルマーの幻影すら「スペクテーター」の世界に招き入れる[5]、

両親に対する子どもの服従はすべての統治の基礎である、それは摂理が我々の長上として置いた人々に対する服従の基準として示されているのである。（一八九号）[6]

十八世紀のイギリス社会には市民革命後の「アンシァン・レジーム」という逆説が投げられるが、「スペクテーター」が維持しょうと努める現状は、まさに、この「アンシァン・レジーム」をも含めている、「スペクテーター」の示した現状への満足、政治的妥協はこのような意味をも持っている。

ところで現体制を謳歌した「スペクテーター」の政治への期待は人間性の完成である。

……人類の幸福と人間性の完成、これがあらゆる政治制度の大目的であらねばならない。[7]（二八七号）

「スペクテーター」によれば人間性の完成の基準は徳、知識、洗煉であるが[8]、貧困と欠乏は人間の精神を卑しくし、専制権力は無知と粗野をもたらす。従って人間性の完成には自由と富が必要である。而も「富と豊饒は自由のもたらす必然の果実である」とされる、すなわち、「スペクテー

ター」は自由→富・閑暇→人間性の完成⑨という図式を描き、これを実現、保証するものとしてイギリス国制を讃え、かつその維持を希求している訳である。

さて、以上のような政治論が何れの階級に立脚するものであるかは明かな筈である。自由と富とを讃え、而も日常の営為よりも富に基く閑暇の中の修養を重視する、これは「スペクテーター」の世界の基軸となった上層市民階級＝商業資本の立場にほかならない。

① 「スペクテーター」の政治的発言としては政治が金融問題に及ぼす影響について比喩風に論じた三号、党争に対してキャンペーンを行った一二五・二六号及び以下で取上げる二八七号がめぼしいものである。

② Spectator, op. cit., vol. 2., pp. 355～59. スマイザースは、この小論をもって、ジョンロック理論のティー・テーブル版であると評する。Smithers, op. cit., p. 231.

③ Spectator, op. cit., vol. 2. p. 356.

④ "different Ranks," "several Ranks," という場合、その含意は基本的には地主階級、市民階級として差支えないだろう。三四号には「このクラブにはどの階級の人もどの地位の人もメンバーとして入っており」という用例がある、(vol. 1, p. 102) また、"the whole Body of the People" という場合も同様であろう。なお、'People' の語義については cf., Emden, C. S., The People and the Constitution, (rep. in 1962) p. 317 seq.

⑤ 具体的には指摘していないが、アン女王期にフィルマーの擁護者のあったことを、ラスキが述べている。cf., Laski, H. J., Political Thought in England, (1950) p. 48.

⑥ Spectator, vol. 2., p. 63. 更に五〇〇号においても、家庭は家父長国家のミニアチュアとして家庭と国家を類比する。cf., vol. 4, p. 79 seq.

⑦ Spectator, vol. 2, p. 359.

⑧ この問題については教育論の項で詳述する。

⑨ 人間性の完成に到る途は読書・思索・社交である。

ロ 教育論

「スペクテーター」はイギリス国制への讃辞を、人間性の完成という問題で結んだが、「スペクテーター」が扱った多岐にわたる論題のうち、比較的多くの紙面が割かれ、而も論旨が明快であったのが教育論である。これは教訓とエンターテインメントを与えるという同誌の性格、更には新らしい支配階級の座に着いた市民階級が、支配者にふさわしい生活様式を求めていた事情に基くものと思われる。

さて、教育を論ずる場合、その前提として一個の人間観がなければならない、「スペクテーター」には事更めて人間論を展開した記事はないが、人間の本質を理性的存在と

して把握していたことは各処の記述から容易に確め得る。[1]

而も、この理性を備えた一人前の人間というものが、生得観念の所有者として存在するのではなく、経験、殊に教育によって形成されて行くというのが、「スペクテーター」の教育論の前提であり、また基本的立場でもあった。

教育の意義について「スペクテーター」は次のように主張する、

教育を受けない人間の魂は石切場にある大理石のようなものである……。

人間の魂と教育との関係は大理石と彫刻との関係に当る。哲人・聖人・英雄・賢人・善人・偉人は往々にして庶民の中に埋もれていることが多い。適正な教育こそが、それらを掘り起し、明るみに出すことができる。（二一五号）[2]

此処では身分、門地、家系に対する依存はない、あるのは人間性に対する明るい期待である。それは未だ暗さを知らない市民階級のオプティミズムの一片である。

ところで教育はどのような環境の下で、その効果を最も期待できるのであろうか、次の一節はそれについての手掛りを与えるものであろう、

中位の境遇（The Middle Condition）これが知識を得るのに最も適しているように思われる。貧困の場合には、我々は足りないものを補うことに気を奪われ、富裕ならば、あり余るものをインジョイしようということに気を配りすぎる……。

要するに中位の境遇こそが自己の徳質を改善しようとする人間に最も適しており、それはまた、前述のように知識の獲得にも好都合なのである……。（四六四号）[3]

すなわち奢侈に流れず、貧困にさいなまれぬ生活、それが人間の向上に最適なものである、[4]そして、このようなものとして「スペクテーター」の世界で示されたものは、言うまでもなく、主として、市民階級の生活である。

さて、「スペクテーター」が市民階級の生活状況に中間的地位を与えたとしても、同誌が教育を通じて市民階級を到達せしめようとした人間像は支配階級としてのそれである。例えば、「スペクテーター」によって語られた教育上の話題を列挙すれば、外国旅行の得失（三六四号）、パブリック・スクールと家庭教師による教育との比較（三一三号・三三七号）、古典教育・実務教育（三五三号）良きしつけ（二九号）等々であり、これらは何れも、ジェントルマン、つまり支

配者を育成するための問題点として、当時、様々に論議されていたものである。[5]

ところで、支配者としてのジェントルマンという伝統の響きの強いこのイメージの中に市民階級の論理を注入して、それに新しい息吹きを与えたのは言うまでもなくジョン・ロックであるが、彼の「教育論」の中には復古王朝期から名誉革命へと戦い抜いて来た市民階級の緊張感が見られる、市民階級のための新しい秩序を支配者として維持して行かねばならぬという使命感が漲っている、例えば次の言葉を見よ、

……中でも最も注意しなければならないのは紳士の職務です。というのは、そういった上層階級のひとびとが教育によって正しい道を歩むようになれば、他の階級のひとびとも間もなく秩序をとりもどすでしょうから。[6]

ロックにとってはジェントルマンの最も基本的属性は、ラスキの表現を借りれば「支配する能力[7]」でなければならなかった。

一方、「スペクテーター」は既にみたように、ロックの示した経験論的人間観の上に立っている、而も、同誌はロックの「教育論」と同じ論題を追っている、にも拘らず、この両者の基調の間には架橋すべからざる溝がある。「スペクテーター」の世界は名誉革命体制の安定の上に立ち、その範囲はクラブ、コーヒー店、居間に限られている。そこに存在する下層民衆は家僕、家婢の類であり、彼らは本来的に主人に対しては従属的な立場しか認められていない、従って、此処でジェントルマンに要求される資質は当然変って来る。「スペクテーター」の世界におけるジェントルマンは上流社交界に受け入れられる挙措、仲間うちから尊敬される知識、徳性を要求される。

要するに、立派な紳士というものは応揚で雅やかな人物なのである。（七五号）[8]

すなわち、"Polite Man" これが「スペクテーター」によって追求されたジェントルマンのイメージである。

ロックにみられた秩序の維持としての切迫感は「スペクテーター」においては社交界の主人公としての優越感、家庭人としての満足感に席を譲る。名誉革命体制の定着に相い応じた市民階級の動向は「スペクテーター」の教育論にも如実に反映されている。

① 例えば、人間の尊厳性は理性の機能にあるという示唆、（三一七号）（cf. op. cit., vol. 2., p. 457）或いは極めて屢々使われる‘Dictate of Reason,’‘Light of Reason’という表現はそれを物語る。
② ibid., p. 139.
③ ibid., vol. 3, p. 433 seq.
④ 一一四号では経済的困窮が心性に悪い影響を及ぼす具体例を示している（ibid., vol. 1, p. 346）。また市民の典型的な生活例としては前述のサー・アンドルーの友人の日記（No. 317., vol. 2, p. 458 seq.）、これと対照的な有閑人士の生活については三二三号（vol. 3, p. 6 seq.）、を参照。
⑤ 当時のジェントルマンの教育の具体的状況についてはcf., Brauer, G. C. Jr., op. cit., 参照。
⑥ ロック、『教育論』（梅崎光生訳、一九六〇）、一一ページ。
⑦ ロックの教育論の社会史的意義についてのラスキの評価は極めて適切である。石上良平訳、『ヨーロッパ自由主義の発達』（一九五一）、八五ページ以下を参照。
⑧ Spectator, vol. 1, p. 235. なお、この七五号では最もまとまった「紳士論」を示しているが、二・三抜き書きすると、
「各人の住む地域で、生活の行為の基準として広く認められている規律に反する行為」は慎しむこと、
「豊かな資産を持つ人は、表情にやすらぎがあり、ふるまいに落着きがある」、
「理性と良識に基ずく永遠の規範で自己の思考を律している人の言行には、えも言われぬ優雅なところがあるに違いない」等々。

八　宇宙観・秩序観

宇宙秩序に関して「スペクテーター」は少なからぬ発言を試みているが、それを単に同誌特有の衒学癖に帰してはならない、つまり、この種の発言については同誌なりの実践的契機が存したのである。それは「スペクテーター」にとっては宇宙秩序であり、そこに信仰やモラルの根拠が存したということである。

「スペクテーター」は言う、

……信仰と献心は理性あるすべての人の心に自然に生ずる、理性ある人は、その目に映ずるすべての対象に神の力と英知の刻印のあることを悟る。神は天地の創造の中に御自身の存在の証を作り給うた……。（四六五号）①

他方、「スペクテーター」にとってのモラルの中心課題は快活（Chearfulness）②であったが、それをもたらすものとして、先ず、「自然界」があった、

……私は此処で、私たちの置かれているこの世界には、心を高め、幸福な気分を保つにふさわしい無数の事物が満ち満ちていることに注目したい。（三八七号）③

自然は人間生活にとって極めて有用であるのみか、その美と調和は人間を楽しませる、たとえ利用価値の乏しい岩

地、沙漠、その他の奇怪な風物もその心を楽しませると。（三八七号）[4]。

以上のように「スペクテーター」は快楽論の根拠を提示するが、注意を要するのは、この快楽観への指向の論理が人性から内発的に示されたものではなく、外在的な摂理、所与の秩序に依拠しているということであり、「スペクテーター」はこれらに対し、極めて観照的であり憧憬的ですらある、

全宇宙は我々に楽しみや慰めを与え、或いは憧憬をそそる事物に満ち溢れている、いわば一種の劇場である。（三八七号）

所与のものに追従、或いは享受するという右の「スペクテーター」の態度を、トーリ的宇宙観（Cosmic Toryism）と規定しつつ、ウィレーは次のように評する、

宇宙の――及び既成秩序の、とつけ加えてもよいだろうが――完全性が既定のものとして受取られ、それをあらゆる破壊的な批判から擁護することが哲学者たちの主要な任務となった。[5]

これ以上、何もつけ加える必要はない。

ところで「スペクテーター」はまた宇宙秩序を極めて静態的・法則的に把握した、

自然は無駄なことは何もしない、宇宙の創造主は、万物に一定の用途と目的とを指定され、行動のコースと範囲についても制限を加えられた、そして若し、そこから逸脱すれば定められた目的に応えることができなくなる……。（四〇四号）[6]

しかし、また、

自然と理性は同一のものを示している。（六号）[7]

とあるように、宇宙秩序は摂理であるのみならず理性的法則でもある。だが、此処に引用された言葉がそれぞれ社会経済に対する発言の論拠や行動の規範として提示されていることが示すように、「スペクテーター」においては右の法則性は更に、人間社会をも貫いている。

以上のように、「スペクテーター」は宇宙秩序を静態的、法則的に捉えたが、更に、階序性をも主張した、「スペクテーター」によれば、宇宙の外部として物質界がある、そして物質のどの部分も、その上に住む多数の生物の必需と便宜に応えないものはない。さて、生物界には、「感覚（Sense）の完成度の様々な度合い」によって「存在者間の階梯」とも言うべきものがあると指摘する。生物の最下層

のものとして「或る生物はただ物質の上にのみ存する」にすぎない、しかし「自然界は様々な種類の生物で埋められており、あるものは他のものの上に立っている」[8]（五一九号）と。もとより、此処では人間の地位も問われる。

この存在の体系において……人間は動物と知的本性との、可視と不可視の世界の中間の区域を占めており、存在者をつなぐ連鎖の結び目となっている……。（五一九号）[9]

以上によって明らかなように、「スペクテーター」の宇宙秩序観は神性、物性、人性を支配する摂理の観念により貫かれ、そして静態的、法則的、階序的なものであった。屢々、宇宙観は社会観のヴァリエーションをなすとも言われているが、右で眺めた「スペクテーター」の宇宙観は社会史的にどのような意味を持つものであろうか。

イギリス十八世紀の思想の出発点ともされるジョン・ロックの社会観は、個人と社会を矛盾なく結びつけているという点で聖トマスの思想とも比較されるが、[10] ロック以後のイギリスの知的雰囲気において秩序意識が著しく濃厚であり、而もその秩序観があたかも中世的、スコラ的な様相に類似していることが既に指摘されている。[11] そして「スペクテーター」の宇宙秩序観もそのようなカテゴリに属していることは上において明白であろう。

再三触れたように「スペクテーター」の時期は名誉革命体制の定着期であり、それは断続することなく、やがてホィッグ支配体制に連なる。これらの時期は巨視的には市民階級の単一支配への過渡期であると考えられるが、過渡期は必ずしも体制の動揺を意味しない、勿論、過渡期なるが故に、伝統的な支配秩序、市民社会秩序の混在がみられる、だが、一般的にみて、この時期は静穏、停滞の無風期であり、体制が風土化されていた時期である。「一時代の自然は次の時代には作為と化す」（ウイレー）と言われるが、「スペクテーター」の時期は体制が「自然」であり得た安定期であった。

「スペクテーター」の宇宙秩序観は右の社会状況を極めて鮮明に反映していると言わねばなるまい。[12] そして、体制に自己の論理を照応せしめた「スペクテーター」が、また逆に、当時の知的雰囲気に更に一層のいわゆる安定ムードを醸成し得たものと思われる。勿論、階序性を肯定、弁証したことは[13]「スペクテーター」の属する市民階級が支配階

級の一員であることを示すものであり、それ故にこそ、摂理に基すく快楽論を展開し得たのである。

① Spectator, vol. 3, p. 438.「スペクテーター」は自然科学が進歩すれば、更に摂理に対する崇拝が深まると考える。（五四三号）、cf. vol. 4, p. 211 seq.

② 「スペクテーター」では"Chearfulness"は"Mirth"と対比されている、（三八一号） cf. vol. 3., p. 191 seq.

③ ibid., p. 208. 更に類似の記述が三九三号（ibid., p. 226）にも見られる。

④ ibid., p. 209 seq.

⑤ Willey, B., The Eighteenth Century Background, (rep. 1962) p. 50. 挿入句も原著者による。なお、社会を劇場に喩える例は一〇号にも見られる、cf. vol. 1, p. 32.

⑥ vol. 3., p. 257.

⑦ vol. 1., p. 21.

⑧ vol. 4. p. 137 seq.「スペクテーター」は此処で Locke, An Essay concerning Human Understanding: Book III, of Words. vi, of the Names of Substances 12. から長い引用をしているが、両者の間には、ロックが認識論において論じていることを、「スペクテーター」が存在論の中で論じているという相違がある。

⑨ vol. 4, p. 139.

⑩ 水田洋、『近代人の形成』（一九五四）、一二〇ページ参照。

⑪ cf., Lovejoy, A. O., The Great Chain of Being, (imp. 1960); Becker, C. L., The Heavenly City of the Eighteenth Century Philosophers (imp. 1963).

⑫ 同時代人、デフォーなどは「スペクテーター」以上明確に、次のように述べる、「神はその摂理の歩みすらも合理的な順序に従わしめる、……原因・結果の大連鎖は神御自身によってさえも妨げられないのである」（『プロテスタント信仰の危険性』）cit. in Novak, M. E., Defoe and the Nature of Man (1963) p. 6.

⑬ 勿論、原著に伴い、明確になった階級区分も、やがて合理化される、

「人はそれぞれ貧富何れかの階級で神の道を歩む」、Law, W., Serions Call to a Devout and Holy Life, (1728), cit. in Humphreys, A. R., The Augustan World (1954), p. 2.

以上、「スペクテーター」の世界を検討したわけであるが、先ず第一に、「スペクテーター」の世界は名誉革命体制の安定に依拠、かつ、それを反映したものであった。

ところで、その世界は伝統的な地主的要素と商業資本の要素の二つから成り立ち、現象的には前者の色の濃かったことは否めない、しかし、「スペクテーター」の世界は決して静止してはおらず、そこには自ら、一つの動向があった、そして、その動向に即するならばこの世界を規定したものは、実は後者の立場であったと言わねばならない。確かに「スペクテーター」は伝統的家父長社会に愛惜の念を惜しまない、けれども、同時に、それが解体の歩みを辿り

始め、それに代って商業資本が農村へも進出し始めたこと、更に、農村にも健全な市民生活が展開されつつあったことを逸しはしなかった、「スペクテーター」の世界は明るい展望が示唆されて閉されるが、その明るさは逝ける家父長の余光のもたらすものではなく、新たな支配階級としての市民階級の曙光によるものである。

「スペクテーター」が名誉革命体制の妥協的安定に商業資本の立場で依存したということは、その論説面からも容易に看取し得た。現状の神格化、秩序ある自由と富との追求、富の上に立った社会的人間像等。

この時期のイギリス、ブルジョアジーの動向について、ルカーチは次のように述べた、

イギリスでは一六八八年のいわゆる〈名誉革命〉の後、一種の転回が始まる。すなわち、この時代の理論家たちはすでに、ブルジョア社会の主人たる勝利的ブルジョアジーのための倫理学を完成しはじめ、ブルジョア的生活形式をその安定の立場から礼讃しはじめている。そしてこれが〈名誉革命〉の性格のしからしめるところとして封建的残余とのひとつの妥協であったために、重点が行動の社会性から私人としてのブルジョア的個人の自己満足ないし自立性に移されはじめる……。①

けだし、「スペクテーター」は此処で述べられているブルジョアジーの保守的転回に商業資本の立場から係わったものと言うべきであろう。

① ルカーチ、（暉峻、他訳）『理性の破壊』上巻、一四六ページ。

（沼津工業高校）

The Spectator and the Society of the Augustan Age

by

Takamichi Yamaguchi

The object of this article is to make *The Spectator's* position clear in the society of the Augustan Age.

The success of *The Spectator* as a literary periodical depended on the stability of the Revolution Settlement which was the basis of the modern English constitution.

Some papers of *The Spectator*, indeed, seemed in favor of the old patriarchal agricultural society, but others more in number preferred the rational and industrious trading society. While it seemed to lament the decline of the old régime it expected, in fact, the new one's growth more heartily.

The Spectator's social and moral teachings were most fitted for the way of life and the taste of the growing upper middle class, the new governing class, which quarrelled and was reconciled with the landed class, the traditional governing class. *The Spectator* offered a variety of topics with philosophical embellishment to the people of the new class and delighted and cultivated them.

The Spectator is the amiable symbol of the conservative modernization of England, and foreshadows the succeeding stagnation in the intellectual climate.

The Democratic Movement in Japan in the Eyes of a French Diplomat

by

Peng Tse-chou

A few years ago some Franco-Japanese diplomatic documents from Paris came into my hands, among which was a letter of high interst written on November 30, 1884 by Joséph Adam Sienkiewicz, the French Ambassador to Japan. We can see from this letter that Sienkiewicz was very biased in his view of the democratic movement in Japan,